

第二十二回熊本大学附属図書館貴重資料展

古今和歌集一〇〇年熊本フォーラム展示

解説目録

古今和歌集

その豊饒の世界

期間 平成十七年十一月四日(金)～六日(日) 午前十時～午後四時

会場 熊本大学附属図書館自由閲覧室

入場料 無料

公開講演会

絵と歌と物語と

日時 平成十七年十一月六日(日) 午後一時～二時三十分

会場 熊本大学附属図書館二階大会議室

講師 森 正人 熊本大学文学部教授

受講料 無料



平成17年度

この展示は附属図書館恒例の貴重資料展であり、「古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム」の一部ともなっています。

本年は、最初の勅撰和歌集である古今和歌集が編纂された年から数えて一一〇〇年、八番目の勅撰和歌集の新古今和歌集編纂から八〇〇年という節目の年に当たります。フォーラムは、これを記念して古今和歌集とその享受の歴史に縁の深い熊本で、展示会・講演会・シンポジウム・能の上演を行い、古今和歌集とそれが生み出した学芸と文化について学術的整理を施し、その成果を教育に活かすとともに、親しみやすいかたちで社会に提供して地域文化の振興に寄与しようとするものです。

本展示は、熊本大学附属図書館に寄託されている永青文庫所蔵の書籍のうちから、古今和歌集とその関連資料を選定して行います。

古今和歌集は、延喜五（九〇五）年に醍醐天皇の命を受けて紀貫之らが編纂しました。日本の文化が唐風から和風へと転換するなかで生まれた画期的な歌集です。勅撰和歌集として権威ある古典として尊重されたばかりでなく、後世の文学、学問、美術、芸能などに大きな影響を与え続けました。王朝の和歌や物語の源泉であり、貴族の教養であり、ものの見方や感じ方の規範であり、歌の学問の対象となりました。そのため、古今和歌集の享受は、日本文化の歴史の中に大きな流れをつくっています。

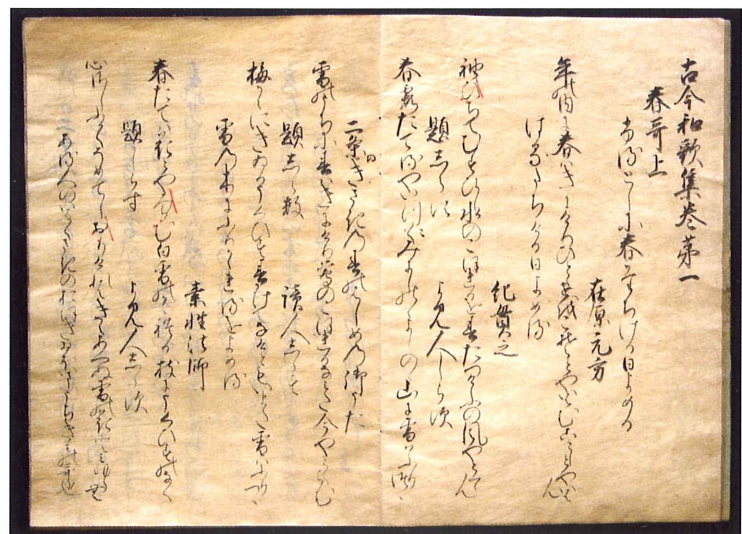
永青文庫は、肥後熊本藩及び細川家の文書や書籍の膨大なコレクションですが、古今和歌集とその享受に関する重要な資料が多数含まれています。肥後細川家の初代の藤孝（一五三四～一六一〇年。号は幽斎、玄旨）が、戦国武将でありながら第一級の文化人であったために、学術、文学、芸能に関する書籍を収集し、また代々の藩主もこれを受け継ぎ、積み重ねたからです。幽斎は、古今和歌集に関する秘説を受け授ける古今伝授にかかわり、とりわけ重要な役割を果たしています。そこで、幽斎関係の資料を軸に、古今和歌集が後代の文学にどのように受け継がれていったか、その流れをたどることができるよう展示することにしました。

1. 古今和歌集 列帖装写本一帖 二二二・八七

延喜五（九〇五）年、醍醐天皇の命によって紀貫之らが編纂した最初の勅撰和歌集。

当本は、細川幽斎（一五三四～一六一〇年）の「…以或本写之至校合者用相傳之本以與幼歳女子…」という奥書を有し、天正十八（一五九〇）年に娘に書き与えたものであることが知られる。このほかに三つの奥書がある。第一に、貞応二（一二二二～一二四一年）の奥書、ついで「授本云」として三条西実隆（一四五五～一五三七年）が享祿二（一五二九）年に子の公順に授ける旨の奥書、第三に「校本云」として、実隆の孫の実枝が天正六（一五七八）年に幽斎の求めに応じて授ける旨の奥書がある。これによって、幽斎は或る本によって古今和歌集を書写し、相伝の本すなわち実枝から授けられた本で校合するとともに、校合に用いた本の奥書を再録したとみなされる。

三重の箱入り。最も内側の箱は、その蓋に古木の梅花を蒔絵にして中央に金で「古今和歌集」と記す。蓋の裏に「御書付」と記した紙の袋が取り付けられ、中に琴山の極札（筆跡鑑定書）と、正徳元（一七一一）年に豊前日出藩主木下俊長が記した由来書がそなわる。由来書によれば、当本は、幽斎が木下延俊（俊長の祖父）に嫁いだ娘の加賀に与えたものであり、木下家に伝



来することになったという。明治初年には所有が変わっており、その後また細川家に移ったことが知られる。

2. 古今和歌集真名序 卷子写本一軸 八・二・甲二

古今集は序文を二つ有する。紀貫之による仮名序と紀淑望（？〜九一九年）による真名序である。真名序は仮名序を踏まえて成ったとされる。「やまとうた」の撰集にもかかわらず、真名序が付される意味は大きく、それは当時の価値基準が中国にあったことを示している。和歌の本質論を緒として、その起源について述べ、上代での展開（人麻呂・赤人讚）、六歌仙評を置いて、最後に撰集の経緯を述べる。論述の順序や表現も仮名序とは異なる面がある。当本は、江戸初期写と思われる一卷で、白文に朱で訓点を施している。

3. 歌仙家集 列帖装写本十七帖 赤二二・三三

三十六歌仙すなわち平安時代中期以前の代表的な三十六人の歌人の歌（家集）の集成。三十六人集ともいう。江戸時代中期の書写か。古今和歌集の撰者となった紀貫之（？〜九四五年）、紀友則（生没年未詳）、壬生忠岑（生没年未詳）、凡河内躬恒（生没年未詳）の歌集も含まれる。なお、貫之集には、古今集編纂の行われている場で折しもほととぎすが鳴き、醍醐天皇の命を受けて歌を詠んだことが載る。漆塗りの箱に納める。

4. 新撰和歌集 袋綴写本一冊 一〇七・三六・六

別称、紀氏新撰とも。藤原兼輔を介して、醍醐天皇から秀歌撰編纂の勅命を受けた紀貫之が、延長八（九三〇）年〜承平四（九三四）年までの土佐在任中に撰集作業を終えていたが、その間天皇も兼輔も世を去り、藤原師輔に献上したとされる。三六〇首中、古今集歌が二八〇首を占める。当本は、奥書を有さないものの、その筆跡から幽斎自筆とみてよい。

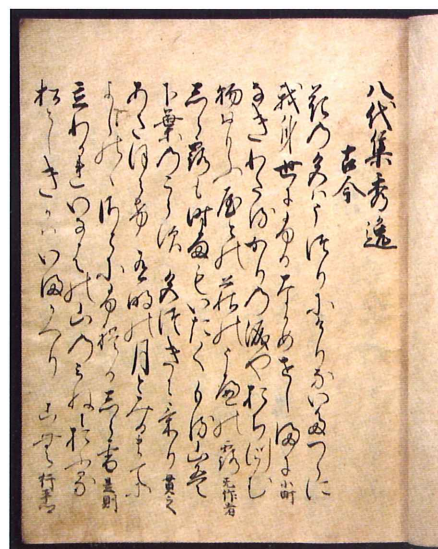
5. 拾遺和歌集 列帖装写本一帖 一〇八・五・二

第三番目の勅撰和歌集。撰者は花山院（九六八〜一〇〇八年）か、その周辺の歌人達といわれる。寛弘二（一〇〇五）年〜四年頃の成立というが、まさに源氏物語が執筆されたのと同時期に当たると見られる。拾遺抄（藤原公任撰）という私撰和歌集とその名前からも混同されがちだが、拾遺集は拾遺抄を全て吸収増補した形。古今集では晩春の花の「藤花」を「夏」の部立に入れるなど独自の弁別意識をもつ。当本は、三条西実隆（一四五五〜一五三七年）自筆本。久村信濃守宗家の所望により写したという大永六（一五二六）年初秋の奥書がある。

6. 八代集秀逸 袋綴写本一冊 一〇七・三六・六

八代集秀歌とも。藤原定家（一一六一〜一二四一年）撰。

天福二（一二三四）年九月成立。古今集から新古今集までの八代集から各十首計八〇首を選んだもの。また当本は、八代集秀逸は幽斎筆であるが、白紙を一枚挟み、後半は中院通勝筆の「三代集之間事」である。三代集之間事は、定家著の歌学書であり、三代集（古今・後撰・拾遺）について、その成立、作者、歌詞の注釈について父俊成から伝授されたものを中心にとめている。主として他家との比較から俊成とその師基俊の説の吟味にも及んでいる。



7. 二十一代集 刊本二十一冊 二二五・九六

古今和歌集より新統古今和歌集に至る二十一の勅撰和歌集の一揃い。刊記はない。江戸時代中期の刊か。各冊「亀山之書」の印がある。漆塗り桐の棚付き箱に納め、箱の蓋の内側に「益姫様ヨリ御戴御表題ハ榮昌院様御筆也」とある。装丁は改装されたふしがあり、表紙に貼られた題簽に書かれた歌集名が榮昌院の手になることがわかる。榮昌院は肥後熊本藩第十代藩主細川齊護なりもりの母、福とみ（一七八七―一八四一年）の法号、益姫（一八〇六―一八七五年）は浅野安芸守齊賢の娘で齊護の室。

8. 天徳歌合 袋綴写本一冊 一〇七・三六・七

一冊の中に天徳歌合、寛平菊合かんげいぎくあわせ、殿上根合てんじょうのねあわせを収める。天徳歌合は天徳四（九六〇）年三月三日、村上天皇が清涼殿で主催した。晴儀歌合としては最大の規模を誇る。また、寛平菊合（寛平御時歌合）は、宇多天皇主催で、八九一年頃までの披講ひこうか。菊花を風流を尽くした州浜すはまに植え和歌を付した。菊合が中心で和歌の優劣は競われていない。古今集秋の部にも引かれる。殿上根合は永承六（一〇五二）年五月五日、後冷泉天皇主催の菖蒲根合。

当本は、慶長五（一六〇〇）年の奥書によると、幽齋はかねてから歌合の類聚を考えており、先哲の遺訓を知るためには俊成・定家の判詞を見るべしという夢告を見て、中院通勝なかのいんみちかつを通じて禁裏本を借り受け、高弟を以て書写・校合したという。その一本である。

9. 伊勢物語 列帖装写本一帖 赤二一六・一七

伊勢物語は「むかし、男、ありけり」で始まる在原業平の一代記の歌物語である。古今集とも関係が深く、業平の歌は仮名序の六歌仙評にも取り上げられ、歌も多く重複する。

当本は、三重箱に納め、箱書にも「一條関白兼良公芳毫 伊勢物語 全」

とあることから一条兼良（一四〇二―一四八一年）筆と伝えるが、筆跡は兼良のものではない。また、本文の間に歌の解釈を中心に書き入れがあるが、これも兼良の伊勢物語愚見抄とは異なる。

10. 春曙抄しゅんしよくしょう 刊本六冊 三・四・四

北村季吟きたむらつきぎん（一六二四―一七〇四年）が延宝二（一六七四）年に完成させた枕草子の注釈書。当本は枕草子装束抄を付随する寛政五（一七九三）年刊本である。紫地に金泥銀泥で蝶鳥を描き出した表紙で改装されている。

枕草子には、古今集に関するエピソードが載る。藤原芳子は父師尹ちろまさ（定子曾祖父、師輔弟）から書・琴・古今集暗誦の三つを学問にせよといわれていた。入内後、村上帝から課せられた古今集二十巻全ての暗誦を、完全にこなした逸話を定子は女房達に聞かせる。

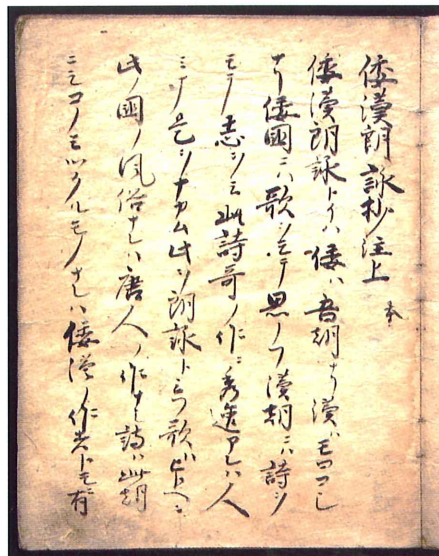
11. 源氏物語 袋綴写本五十四冊 丑上・一

永青文庫は室町期写の二組の源氏物語寄合書よりあひがき（巻ごとに異なる人物が書写したもの）を有するが、そのうちの二組。この寄合書は、「源氏物語筆者目録」の付属文書を有する。主たる筆者は「桐壺」近衛前久さきむねひさ、「帚木」中院通勝なかのいんみちかつ、「花宴」細川忠興ただおき、「朝顔」本阿弥光悦、「玉鬘」細川幽齋、「権本」里村紹巴じょうは、等々。詠えの四段組茶漆塗箱に納める逸品。

「梅が枝」（少納言良昭筆）に、兵部卿宮が、明石姫君入内に際して源氏に延喜帝の古今集を進呈する場面として「唐の浅縹あさなだの紙を継ぎて、同じ色の濃き紋の綺きの表紙、同じき玉の軸、綾だんの唐組の紐などなまめかしうて巻毎に御手の筋を変へつついみじう書き尽くさせたまへる。」とある。当時、古今集が巻物の形態であったことは注意される。

12. 倭漢朗詠集注 列帖装写本四帖 一〇七・三六・六

藤原公任（九六六〜一〇四一年）撰の和漢朗詠集の漢詩文の注釈。鎌倉時代中期以前成立の永濟注系に属する。書写年代は室町時代初期を下らないとされる。第四冊の奥に細川幽齋の手になる識語があり、それによれば、かつて薩摩で入手し、慶長二（一五九七）年に補修を加えたという。和漢朗詠集の「帝王」の部には古今和歌集の真名序の一節が採られているほか、本書は、書名の「倭漢朗詠」を解釈しながら「古今序二見タリ」と、古今和歌集の序文を引証する。



13. 無名抄 袋綴写本一冊 一〇七・三六・二

鴨長明（？〜一二一六年）の歌論書。長明は方丈記の作者として知られるが、千載和歌集、新古今和歌集以下の勅撰集に三十五首入集するなど、歌人としても評価されていた。書名が与えられなかったためにこのように呼ばれる。建暦元（一二一一）年以降の成立。古今和歌集への言及は多い。幽齋による奥書「此抄所持之本不審多之間以之昌／為書生以一兩本取捨而書改了／慶長三年孟秋初六／丹山隱士玄旨（花押）」があつて、門人之昌（佐方宗佐）に書写させたものであるが、中途に相当の脱落がある。

14. 詠歌大概 列帖装写本一帖 松井家旧蔵 文学部日本語日本文学研究室配架

藤原定家（一一六二〜一二四一年）の歌論書。承久三（一二二一）年以降まもなくに成立か。漢文体の歌論と秀歌撰から成り、心は新しきを求め、詞

は古きを用いよとし、見習うべきは、古今集、伊勢物語、後撰集などの上手の歌と説く。

当本は「天正廿年仲夏十七日／也足子（花押）」の奥書があり、一五九三年に中院通勝（一五五八〜一六一〇年）が書写したもの。通勝は細川幽齋に歌道を学んだ。

15. 三抄秘（三秘抄） 袋綴写本一冊 一〇七・三六・二

藤原為家（一一九八〜一二七五年）著かとされるが未詳。三代集（古今集、後撰集、拾遺集）の歌を取り上げ、声点（アクセント記号）を付し、読み、てにをは、長歌・短歌の事などにわたって記したものの。各集の末尾に簡単な伝を付し、作者の名をあげ、その読み様を示す。神宮文庫本奥書に「この三冊は三代集に関する為家卿の聞書であつて、三秘抄と号するものである」という記述は、幽齋本系統のものに限るために著者未詳なのである。当時多かつた仮託書の一つと見る説もある。

16. 十六夜日記 袋綴写本一冊 一〇七・三六・八

藤原為家（一一九八〜一二七五年）側室阿仏（？〜一二八三年）の紀行文。為家の没後遺産の一つであつた細川庄の相続を巡って、嫡男二条為氏と阿仏所生冷泉為相とが争い弘安二（一二七九）年十月十六日その訴訟のために自ら鎌倉へ下つた。その折の旅日記（路次の記）と鎌倉滞在記（東日記）とからなる。当本は流布本では最善本の一つとされる。慶長三（一五九八）年孟冬二十九日の幽齋奥書によると、連歌師是齋兼如（？〜一六〇九年）に書写を依頼した兼如自筆本である。

路次の記の十月二十六日条、富士山を見て「朽ち果てし長柄の橋を造らばや富士の煙も立たずなりなば」などの歌が詠まれる。これは、古今集仮名序に拠るものである。

17. 閑居抄 袋綴写本一冊 一〇七・三六・六

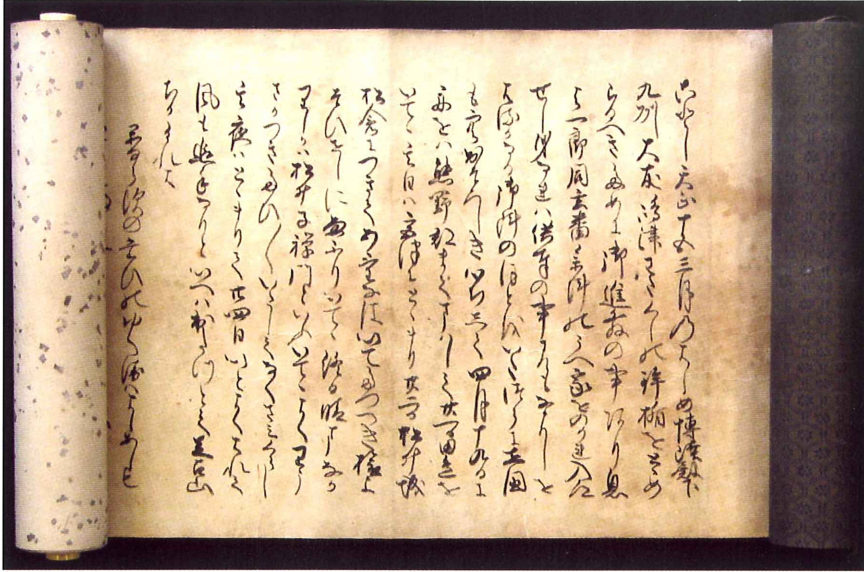
和歌・連歌作者、古典学者の肖柏しょうはく（一四四三〜一五二七年）の秀歌撰。肖柏には九代集、六家集のような和歌抄出本があるが、仁和寺蔵本の奥書により永正四、五（一五〇七、八）年の間に作られたものとされる。古今集から続後撰集に至る十代の勅撰集から撰歌したものであり一三二四首を有する。肖柏は座右に置いて簡便に参照することが可能な抄出本を編み、和歌連歌の実作上の料としたのであろう。永青文庫本は四二首を欠くが、「以也足軒（中院通勝）本令書写之／遂一校畢」と慶長二（一五九七）年冬十月下澣の幽斎奥書を伴う。

18. 九州道の記 卷子写

本一軸 一〇八・五・

一九

細川幽斎作の紀行文。天正十五（一五八七）年三月、九州の島津・大友氏を征伐するために豊臣秀吉は大軍を擁して大坂を出陣、幽斎の嫡男忠興らも従軍した。幽斎は無為の在国を憚り翌月、田辺城から出る。往きは山陰道で、五月末に博多着。太宰府等諸所を訪ねるうちに事が収まり秀吉が薩摩から帰還。七月七日の帰陣に合わせて帰りは山陽道



を巡る。折々に詠まれる和歌、連歌が幽斎の文人としての側面を余すところなく伝える。

幽斎は出雲において、「この神のはじめてよめることの葉をかぞふる歌や手向たむけなるらん」の歌を詠んだが、それは古今集真名序の、和歌の起源を説いた箇所たしに拠るものである。

当本は幽斎自筆のもので、黄色地に青色で亀甲きっこう繋ぎに菊文様を織りだした美麗な表紙の卷子本である。

19. 吾妻あづまの道の記 卷子写本一軸 一〇八・五・九

木下長嘯ちやうせう子（一五六九〜一六四九年）の紀行文。長嘯子は秀吉の北政所（ねね）の兄木下家定の息子。長嘯子の初の散文作品とされ、天正十八（一五九〇）年、秀吉の小田原征伐に従っての折のものである。当本は、和歌の師である幽斎自筆であり、長嘯子自筆本が所在不明の今日、最善の一本である。長嘯子が鏡山で詠んだ「鏡山春の霞にくもらずは君が千年ちとせを見ても行かなくむ」は秀吉の御世ごよを寿ぐものだが、これは、古今集の「近江のや鏡の山をたてたればかねてぞ見ゆる君が千年は」という、醍醐天皇の御世の続くことを予祝した歌に拠る。

20. 和布刈わふかり／敦盛／井筒／三輪さんりん／當麻たいま 袋綴写本一冊 一〇六・一〇・一

三

能の稽古本。肥後熊本藩第六代藩主細川重賢（一二二〇〜一七八五年）の「仕舞付」のうち。「和布刈」の曲の末などに「明和七年庚寅舟中」と墨書、当本の末尾に「明和七年庚寅六月」と朱書が見える。重賢公日記によれば、重賢は明和七（一七七〇）年五月三日に江戸を発ち、六月八日に熊本に到着している。参勤交代の舟の中で稽古に励んだようである。「井筒」には、古今和歌集仮名序の在原業平評が取り込まれている。



21. 古今和歌集聞書 袋綴写本二冊 二・三・四八

連歌師宗祇（一四二一〜一五〇二年）が門弟に授けた古今集注釈書。江戸初期写本。宗祇の関与した古今集注釈としては、東常縁から授けられた「両度聞書」、門弟肖柏に与えた「古聞」、同じく門弟宗碩に与えた「十口抄」などがあるが、当本は巻末奥書から「文亀二年宗祇注」と呼ばれる系統の本であることがわかる。受者についてははっきりしないが、宗坡あたりではなからうかと推定されている（片桐洋一『中世古今集注釈書解題三』）。ほかに蓬左文庫蔵本などがある。

22. 古今和歌集聞書 列帖装写本一帖 一〇八・五・一八

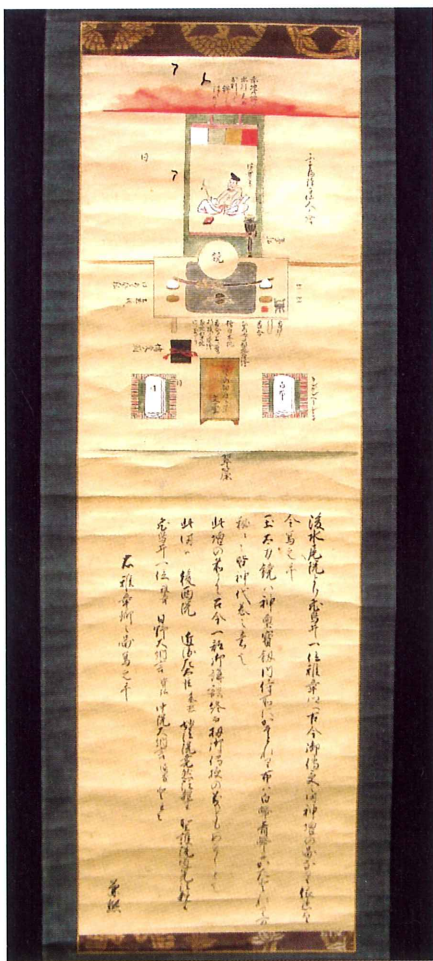
外題には「古今和歌集」とあるが、古今集の注釈書。細川幽斎筆本。誰の手に成る注釈かはつきりしないが、いわゆる「三流抄」など鎌倉期成立の古注の影響のもとに記された箇所もある。断定はできないが、室町期の連歌師あたりによる注釈かもしれない。少なくとも歌道家の注でないことは確かである。朱・墨二筆の書き入れが存在する。

23. 古今集伝受之式 卷子写本一軸 八・二・三甲

古今伝授の式次第を記したもの。奥書によれば、慶長十四（一六〇九）年九月に素然（中院通勝）が幽斎自筆本をもつて写したものがもとなつていゝ。幽斎の時代において、古今伝授の儀礼的側面がいかに重要視されていたかを窺うことのできる資料である。その後、中院通村から法橋栄治を経て青木丹仍へと伝わったことが奥書に記されている。

24. 古今伝授ノ図 紙本着色掛幅一軸 二二二・三〇

本図は、上段に古今伝授が行われた時の座のしつらえの様を描き彩色し、下段にはそれを図にした経緯としつらえの意味などを説明している。説明によれば、後水尾院（一五九六〜一六八〇年）が飛鳥井雅章（一六一一〜一六七九年）に伝授した時のもので、雅章の図を鷹司兼熙（一六五九〜一七二五年）が写したとある。後水尾院は古今伝授を八条宮智仁親王（一五七九〜一六二九年）に受け、智仁親王は細川幽斎に受けた。なお、しつらえの中心は柿本人麻呂像で、このような和歌の特別な席に人麻呂像を掛けることは平安時代末から行われていた。人麻呂が歌聖として神格化されていたためである。



25・古今集清濁讀曲 袋綴写本一冊 二・四・二三

慶長七（一六〇二）年に幽齋から佐方宗佐に与えられた、古今集の読み方にかかわる伝書。文政元（一八一八）年の転写本。中世の歌学においては、歌中の語や作者について、発音の仕方が故実として伝わっていた。そうした故実について、音の清濁を中心にまとめたものである。宮内庁書陵部には、これと同系統と思われる古今集清濁口決一冊があり、そちらは寛永六（一六二九）年に智仁親王が宗佐の本を借写したものである。本書には書陵部本にない、「…応嚴命、則予再三遂勘校、重而加奥書進上之、…」との寛永二（一六二五）年奥書があるが、この「嚴命」の主が智仁親王であろうことは容易に推測できよう。

26・切紙十九通 写本一括十九通 八・二・八三乙

一般に、古今伝授ということばがかまびすしく言われるようになるのは、宗祇以降のことであるが、伝授にあたっては古今集の信頼すべきテキスト（証本）、注釈書（序および和歌についての注）、そして「切紙」と呼ばれる秘事を記した紙片が、師より門弟へ授与される。その切紙の実例として参照されたい。本切紙は江戸時代のものであるが、授者・受者とも不明。ただし切紙の内容から、宗祇流の切紙とみてよく、近衛尚通が宗祇から受けた切紙に一致するものが多い。十九通の内、一通は目録。

本解説目録は、フォーラム実行委員会の鈴木元（熊本県立大学文学部助教
授）、徳岡涼（熊本県立大学非常勤講師）、森正人（熊本大学文学部教授）が
分担執筆した。

第二十二回熊本大学附属図書館貴重資料展
古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム展示
解説目録

古今和歌集 その豊饒の世界

森正人・鈴木元・徳岡涼共編著
平成十七年十月刊
熊本大学附属図書館／
古今和歌集一一〇〇年熊本フォーラム実行委員会